

理論を生かし実践から学ぶ

「生涯学習実践研究交流会」システムの成果

—九州支部大会25周年の意味—

大 島 ま な
(九州女子短期大学)

はじめに

福岡県立社会教育総合センターを会場に毎年5月の第三土曜・日曜に開催している「中国・四国・九州地区 生涯学習実践研究交流会」(以下、「交流会」と称す)は、今年2006年に25回記念大会を無事終えた。1982(昭和57)年に志を同じくする者40名足らずが福岡教育大学の教室に集い6事例の発表から始めた会も400名を超える参加者を集めるようになり、これまでの発表事例総数は700近くに及ぶ。筆者はその初期から参加し、事務局にも関わって四半世紀が過ぎた。交流会に育てられたようなものである。

交流会の趣旨は、研究(者)と実践(者)の実質的な交流を地方で実現しようとするものであった。実践を理論的に研究し学問的成果を実社会の生活現場の向上に結びつける試みであり、また実践というフィルターを通して理論を問い直すという試みでもある。日本生涯教育学会が堅持してきた「実践性の尊重」であり、岡本包治初代会長の言う「現場性」の重視である。

この25年間は、日本がこれまでに経験したことのない「変化の時代」であっ

た。時代の中で、市民の生活も大きく変化し学習ニーズも多様化した。従来の制度は軋み始め、改革を求められている。変化に対応し、市民のニーズに応えるために、現場の実践者は暗中を模索しながら進んできたに違いない。交流会という一つの「実践と研究の交流システム」は、このような激変の中で何を成してきたのであろうか。地方都市でのこのような会が進化発展してきたことの意味は何か、本論で確認したい。

1 大会運営システムの工夫

交流会の運営システムそれ自体が、生涯学習推進事業の一モデルとも言える。その工夫は当初からあったものではなく、会を重ねる間に蓄積された知恵であり、経験から学び経験を活かして生まれた方法である。具体的なポイントは次のようなものである。

(1) 手づくり・手弁当の集まり

交流会は、日本生涯教育学会九州支部と中国・四国・九州地区の生涯学習に関係のある有志が共同で運営している。入会費・年会費等は特に取らずに基本的には集まった人の参加費で成り立っている。学会の全国大会と同じく発表者にも司会者にも交通費は出ない。発表者の肩書きが何であれ特別扱いはなく、皆平等な立場の参加者である。全くの手弁当の会に、遠方からの参加が増えていった（最初は「九州地区」大会であったが、第14回大会（平成7年）より「中国・四国」までエリアを拡大した）こと、また一度参加した人が繰り返し来ていることは、「手出しをしても参加する価値がある」という評価と受け止めてよいだろう。当日、受付前のロビーには事務局のメンバーや福岡の会員が立ち並び、遠来の参加者に心からの歓迎の意を表している。

(2) 多様な参加者：志縁の仲間

交流会は、時代の変化に立ち向かい、変化のエネルギーを活用しようとする人々の集まりである。「変化」は生活の全領域に及んでいる。故に、交流会の参加者も広範囲な領域に及んでいる。行政も民間も研究者もいる。社会教

育も学校教育も産業界も参加している。まちづくりや地域振興の実践には異業種の人々が多く集まった。従って、参加者は必ずしも学会員であることを条件としてこなかった。日本生涯教育学会には、この意義を理解いただき支援を得てきた。感謝するところである。

（３）実行委員会方式

初めのうちは当時福岡教育大学の三浦清一郎研究室が事務局として、事例の発掘、発表者の依頼から当日運営の実務まで、すべてを担って会を運営していたが、第８回大会（平成元年）より各県の有志による実行委員会を組織して運営にあたることにした。実行委員は、県や市町村の行政関係者であったり民間の生涯学習関係者であったりするが、それぞれの県における実践を見渡して、特に先進的な事例、モデルとなりうる事例などを「発掘」し、「推薦」することが大きな役目である。実行委員会を組織したことによって、恒常的に安定して各地の実践事例が集約されるようになり、また各県内に交流会の情報が流れる窓口もできた。

（４）福岡県立社会教育総合センターの役割

第３回大会（昭和59年）から、福岡県立社会教育総合センターを会場としている。県の行政職員に交流会を支える有志が何人もいたことは力であった。大会当日は「貸切」であるために、柔軟な施設利用を認めてもらっている。センター職員が交流会運営のノウハウを代々引き継ぎ、年々工夫を重ねてきた蓄積そのものが財産と言える。（センターは主管となっている。）

一方、県のセンターとしても、九州あるいは西日本各地の生涯学習に関する実践報告が居ながらにして集まることは、大きな魅力であり収穫である。交流会情報・資料の収集・整理と発信（広報）においても、センターは重要な役割を果たしている。また、福岡の実行委員を中心に事務局を運営しているが、大会事務局をセンター内に置くことができるようになって準備から当日までの運営がよりスムーズになった。

（５）大会期日を固定：毎年５月の第三土・日曜日

参加者に周知してもらい年度の計画を立てやすいように、また上記会場の

確保・準備のことも考慮して、大会期日を、毎年変えずに5月の第三土・日曜日に固定している。参加者の多くが、毎年この土日は交流会のために「空けている」という声を多くきく。

（６）懇親会と特産品せり市

実践事例の発表と同じ比重で大切に考えているのが、「交流」の場の設定である。そのため、夜の懇親会は二次会まで入れると6時間にも及ぶ。発表6時間、交流6時間である。発表の後であれば、「もっと聞きたかった」ことを発表者に直接インタビューしたり、「聞けなかった」ことを質問したりと、事例発表の延長線上の交流もここで行われる。名刺を交換し、人的つながりを後で仕事に活かしている例も多い。生涯学習の現場でぶつかっている障害や苦労を共感できる仲間と語り、励ましあい、勇気づけられる場でもある。

懇親会の中で行われる「特産品せり市」は、参加者が持ち寄った各地の特産品をPRも兼ねて「せり」にかけ、その売り上げを大会運営費に回すという仕組みである。この売上金は、プログラム印刷費に当てられている。

（７）施設ボランティアや学生ボランティアによるサポート

事務局、実行委員会、センターを中心とした県行政の職員だけでは、400人を超える当日の参加者にきめ細かな対応は難しい。ボランティアのサポート・スタッフの存在によって、厚みのあるサービスが保障されることになる。センターのボランティアが、例えば新緑の下に緋毛氈を広げてお茶の御点前を披露してくれるコーナーは、和やかな時間と空間を創り出して遠方からの参加者を迎え、歓談を促進する。大学生ボランティアは受付や会場に付いて大会運営の一端を担い、手伝いながら彼ら自身が学ぶ機会ともなっている。

（８）生涯学習フォーラム『この指とまれ』と生涯学習通信『風の便り』

交流会は、①年に一度しかない、②限られた時間内に多くの実践事例を発表してもらうために「深める」学習はあまりできない、一つの事例をもっとじっくり検討できるような学習会を年に何回か開いてほしい、という要望が以前からあった。そこで、交流会のミニ版として、①月一回（原則第三土曜日）、②各回ごとにテーマを設定し、そのテーマについての実践から1～2例

を選んで発表・質疑応答する 1)事例研究会と 2)テーマに関する論文(三浦清一郎会員執筆担当)の勉強会, 3)希望者による夕食会を組み合わせたフォーラム『この指とまれ』を、福岡県立社会教育総合センターを会場に2000(平成12)年からスタートした。このフォーラムの通信誌でもある『風の便り』は、フォーラムに参加できない人たちにもその中身を伝え、関連情報を共有し、生涯学習関係の諸問題について考察する刺激剤となっている。

学問的成果を実践に活かし、また実践を通して理論を問い直すという趣旨は、実はこのフォーラムによってより確かなものになったと言える。例として、子どもの危機的状況をテーマに学習を進める過程で、2つのモデル的实践(1つは福岡県みやこ町の「豊津寺子屋」事業、もう1つは福岡県飯塚市の「ほなみマナビ塾」事業である)が生まれたことがあげられる。青少年教育の理論を具体的な内容・方法を備えた教育プログラムとして提示したこれらの実践は、フォーラムを中心に理論的な裏づけを確認しながら進化し続けており、実践の中で理論が試される過程にメンバーも注目している。

2 プログラムの力：事例の中身が命

(1) 4分科会32事例：できるだけ多くの事例を示す

できるだけ多くの実践事例を出したい、との思いから、1事例につき20分間の発表、5分間の質疑応答で、4分科会4事例の発表を同時進行で実施、大会2日間で32事例の発表を行ってきた。ここ数年は全体プログラムを変えたことによって28事例となったが、基本的な考えは変わらない。1事例の発表にもっと長い時間設定を、との要望もあるが、聞き足りない分は後の懇親会でフォローしてもらうことにしている。

(2) 実践事例の選択：発掘者・推薦者の視点

各地の実行委員によって推薦される事例は、特に成果が認められる成功事例、「戦略的視点」を提示できる事例、時代を読んだ「先進的」な事例、そして参加者がそこから自分の実践のためのヒントやアイデアを盗めるような「モデル性」のあるものを求めている。それは、地方による地方のための地

方の実践研究、地方の状況にみあった学習・交流・地域づくりの戦略を実践的に研究する場としての交流会の命である。事例を発掘・推薦する実行委員各人の視点が重要である所以である。実践のどこに目をつけ取り上げるのか、実行委員の生涯学習事業に対する理解や時代を分析する力が反映される。事例の価値を重視する事務局の意図を伝えつつ、一定の基準を示し「質」が保証されるように、推薦書類の様式を検討するなどの工夫も加えている。

（３）当日配布プログラムの工夫

４会場で同時進行する分科会のどこに参加するのか、参加者は選択に迷う。分科会は、「青少年関係」「高齢者関係」「まちづくり」「民間・NPO 関係」などできるだけ類似した領域の事例をまとめている。同じ時間配分で進むので、聞きたい事例を選びながら会場を移動して回ることも可能である。選択の判断を助けるために、当日受付で配布するプログラムには、各事例のテーマの下に200字程度で概要をまとめて記載している。また、前年度のせりに特産品を提供してくれた人たちの一覧を掲載することにより謝意を表明している。

（４）特別企画の設定

第５回大会（昭和61年）より時期に即したテーマを取り上げ、全体会としてシンポジウムやインタビュー・ダイアログを行ってきた。登壇者は、事例と同じく実践を持っている人であり、その実践に基づいて語ってもらう。「実践なくして発言権なし」という基本精神はここにも貫かれている。先進的な実践に関わっている登壇者を通して問題を共有することにより、参加者は時代の動きを捉え、向かうべき先を見通すヒントを得ることができる。

３ 交流会の社会的機能

（１）実践者と研究者の研修の場

言うまでもなく、交流会は参加者にとっての学習の場である。付言するならば、「役に立つ」研修の場である。実践者にとっては、日々の仕事の意味を問い直し、方法論を確認する機会である。具体的な課題に対して、「使えるア

アイデア」や「解決のヒント」に出会うことができる。また、研究者にとっては、実践を通して理論を検証しつつ研究の価値を確かめる機会となる。そのためには、参加者自身の「問題意識」が前提である。何かを「掘み取って」帰ろうという意欲に満ち、問題意識を共有する者同士の集まりは、グループの雰囲気そのものも学習環境として大切な要素を成している。

（２）人的ネットワーク・情報ネットワークの深化拡大

「交流会」という名の通り、人的交流、情報交流に重きを置いている会である。懇親会はもちろん、コーヒープレイクなどの時間帯を長めに確保する配慮をしている。ロビーには、各地（事業）の PR ポスターやチラシ、広報誌などを自由に展示できるコーナーも用意している。多種多様な人たちの集まりの中で名刺が行き交う。実践事例という「材料」があるので、話が具体的に進む。その中には、人材の発見もある。後々、各所で人と人がつながって新しい事業に発展している例、他所からもらったアイデアを応用して事業展開している例などを少なからずきく。意欲とアイデアの連鎖が新たな実践を生み出す原動力となっていることは、「交流会」の大きな意味であろう。

（３）実践の社会的承認

事例発表者の多くが、自分の担当する事業が取り上げられ、発表の場を与えられ、人々に評価されるという過程を経て、自分のやってきたことの意義を改めて見出し、また明日からも頑張ろうという「勇気」をもらったと言われる。すなわち、苦労した実践が社会的に承認されることによって、次の取り組みへの活力が与えられたということである。実は、現場の実践者にとってこのような機会は少ないのではないだろうか。自分のやってきた「日常のこと」が皆に注目されるほどのことなのだろうか、と遠慮がちに話し始める発表者も少なくない。発表はしなくても、同じような取り組みをしている実践者が発表者に共感し、苦労を共有することによって評価を自分に重ね、自分の仕事の「価値」を確認して「元気」をもらったという声もきく。実践者を惹きつける吸引力はこの「社会的承認」によるところも大きいと考える。

（４）生涯学習の概念付与

面白いことであるが、発掘され推薦されて取り上げられる先進事例の発表者自身が、「生涯学習実践研究交流会」という冠を見て、「私のやっていることは生涯学習なのか」、「自分が生涯学習に関連した事をやっているとは思っていなかった」と言われることが多かった。人生の各期に生活のあらゆる領域において行われる学習は、あらゆる分野・領域の活動を含む。教育分野以外の事例も当然入る。交流会のプログラムには、そのような多様な事例が集合している。そのことによって、それが生涯学習活動であるという「視点」を発表者にも参加者にも「与える」ことになったのである。

初めから生涯学習活動があったのではなく、さまざまな活動が生涯学習の概念の下に「発掘された」ことによって、生涯学習活動として「認知」され、整理されたといえよう。25年間続いた交流会は、発表事例を生涯学習の観点から意味づけ、また発表事例の豊富化が生涯学習の概念を膨らませるという「概念付与」の循環を辿ってきた。生涯学習の総合性は、交流会においては参加者と事例の多様性によって証明されたのである。

おわりに

実践においても研究においても、仮説と検証のプロセスを継続して吟味していくことが重要である。漫然と前例を踏襲するのではなく、試行錯誤の中で方向を見定め、方法論を問い直し「改善」していくことが求められる。交流会は、その道しるべを常に具体的に提示してきたように思う。そのことによって実践者も研究に関わる者も育てられて力をつけ、結果的に、「地方の力」を育ててきたと言えるのではないだろうか。地方は合併の波の中で「生き残り」の道を模索している。地域の振興やまちづくりに、交流会は「人づくり」の観点からこれからも役割を果たせると考える。

交流会を長く支えてきた中心メンバーの多くが、本学会の会員であり、本来ならば、この会についての論をまとめるべき人材は他にいると思っている。本論の内容は、その志ある仲間たちとの学習会やフォーラムの成果である。

<参考文献>

- ・ 日本生涯教育学会『日本生涯教育学会年報』第20号，1999年
- ・ 三浦清一郎 編集代表 九州地区生涯学習実践研究交流会『生涯学習とコミュニティ戦略』（財）全日本社会教育連合会，1991年
- ・ 三浦清一郎 編集代表 中国・四国・九州地区『生涯学習とコミュニティ戦略Ⅱ』（財）全日本社会教育連合会，1997年
- ・ 三浦清一郎 編著『市民の参画と地域活力の創造－生涯学習立国論－』学文社，2006年